



「NO! 戦争する国」生かそう「平和憲法」と題して開かれた集会で安全保障関連法案を批判するむのたけじさん
 長野市で2015年6月7日、同書刊行撮影

むのたけじさんは生涯を通じて戦争報道の責任と反戦平和を訴え続けた。親交があった作家やジャーナリストからは「平和への思い

を引継いでいかなければいけない」としのぶ声が上がった。むのさんと共に特定秘密保護法の廃止を訴えた作家の澤地久枝さん(89)

は「100歳を超えて体力的な心配もあるのに、反権力的な活動を続けたことが奇跡だ。『長い間、ありがとうございました』と伝え

たい」と話した。澤地さんは安倍政権が特定秘密保護法を成立させる状況に、「戦争に近づいて行っている」と、むのさんと同じ憤りを抱いていた。集会などで顔を合わせ、戦時下で新聞がいかに真実を報じなかったかを具体的に語るむのさんの講演に耳を傾けた。「新聞記者として大本営発表を報じた責任が、100歳を超えても活動する原動力にあった」と振り返った。ジャーナリストの大谷昭宏さん(71)は昨年8月、むのさんをインタビューする機会があり、「メディアが本當のことを伝えられなく

元朝日新聞の従軍記者で戦後、郷里の秋田県で週刊新聞「たいまつ」を発刊し、反戦を

いたま市中央区の自宅で亡くなった。101歳。葬儀は近親者で営む。後日、しのぶ会の開催が検討されている。

美郷町出身。朝日新聞記者だった戦時中、東南アジアの従軍特派員を務め、1945年の終戦時に「戦争に加担した新聞社の責任は免

れない」として退社。48年に郷里に近い橋本市で「たいまつ」を創刊し、反戦・平和やジャーナリズムについて積極的に発言した。78年に休刊後も講演や執筆活動を続け、今年5月の憲法記念日の護憲集会には車いすで登壇。戦争は始めたら止めようがない。とことん頑張りぬこう」と最後まで訴えた。【池田一生】

なっている」と心配する様子が印象に残っている。大谷さんは「二度と戦争を引き起こさないため、メディアは『真実を伝える』というむのさんの姿勢を引き継いでいかなければいけない」と話した。

むのさんは朝日新聞記者として終戦を迎えたその日、戦争報道の責任を感じて退社した。だが、2008年の本紙のインタビューでは「退社を踏みとどまり、『本當の戦争はこうだった』と読者に伝え、おわびすべきだった」と話した。全国各地の講演では「平和を願うなら、世界に向かって声を上げなさい。黙とうや祈りを送るだけでは意味もなごう」と呼びかけた。

「たいまつ」発刊 反戦ジャーナリスト

101歳

むのたけじさん死去



ボロボロ旗をくち

むのたけじ

われ住むところわが都



【島田信幸、池田一生】